Special Issue 特集

「筑女の教育」最前線レポート②

幼稚園から大学院まで、筑女の「人間教育」に通底するものとは？

筑紫女学園ならではの「自律のこころ」を育む教育

「浄土真宗の教えにもとづく人間教育」を建学の精神とする筑紫女学園では、校訓に「自律・和平・感恩」を掲げています。中でも「自律」は人間教育の基礎となるもの。そこで今回は、幼稚園から大学院まで全学共通に流れる「自律のこころ」を育む取り組みについて明らかにします。

CASE-1 幼稚園

ここから始まる人間教育

小さな成長にも気づいて褒めることで自信につなげ、自ら考えて動く力に

教員との信頼関係が「一歩」を踏み出すきっかけに

自律とは、自分の人生を自らが生きること。自分自身を見つめる中で、さまざまな「恵み」によって生かされていることを自覚し、自ら考え、自ら判断し、自ら行動していく姿です。

そういう意味では、本学園が校訓の最初に掲げる「自律」とは、他から離れて独り立ちするというニュアンスの「自立」とは、趣を異にします。

「入園すると、それまでの母親と1対1の環境から、初めて集団の中の一人として生活を始めるわけですから、こちらがいきなり何かを教えたり、ましてやクラスを最初からまとめていくことなど到底できません。それぞれに自分だけの世界を持ち、善し悪しなどの判断基準も十人十色…。そうした中で私たち教員は、子どもたちにとって"最初のお友だち"と思いながら、しっかりと信頼関係を築くことから始めていきます。"先生がしているから、"先生と一緒なら"という気持ちの芽生えが、最初の一歩につながっていると思います」

（原田理恵 幼稚園教諭〈年少組担任〉／以下同）

▲年長の園児が組み上げた「カプラ」。この小さな積木の組み合わせは無限大。子どもの自由な発想で、日々いろんな作品が生み出されています。

▲毎年2月に開催される「竹馬乗り発表会」。自分で作った竹馬を、自分の力で乗れるようになります。

「自由教育」ではなく子どもの気持ちに寄り添う「自律教育」

こうした小さな成長をさらに伸ばすために、筑女の幼稚園には分刻みの時間割はありません。

「何かに熱中している時は、子どもにとって学び、成長している時。だから充分に遊んで満足するまで自由にさせています。ですが、ただ自由にさせているのではなく、人間関係の基本や教育的要素を、子ども一人ひとりに流れている時間の中で一番良い時にきちんと組み込みながら、自ら興味を持って動く姿勢を大切にしています」

そのうえで、子どもが伸びた瞬間を見逃さず、必ず褒めるのが、教員共通のスタンス。

「苦手だった野菜をほんの一口食べることができたり、お友だちに気持ちを伝えられるようになったり、年下の子のお世話をしてくれたりと、変化は子どもによってそれぞれですが、褒めてあげると自信がついて、自ら考え、判断し、行動するようになっていくんです」

子どもの気持ちを幅広く捉えられるように型にはめ込まない育み方こそ、筑女ならでは。「今日はあれもしてみよう！」そんな想いで登園する子どもたちの瞳はキラキラと輝いています。

▲「遊びの中に学びの要素を盛り込みながら、園児たちが熱中するポイントを探っています」と語る原田理恵教諭。

幼稚園の「自律のこころ」を育む教育

CASE-2
中学・高校

教職員が全力でサポート

自分を知り、広い視野から将来と向き合う環境で、輝く未来を…

さまざまな取り組みで興味・関心・意欲を喚起

生かされている自分を知り、その自分を支えてくれる周りの存在に気づきながら「自らを律していく」ために、中学からさまざまな取り組みを行っています。

中学1・2年次に行う、クラスやグループ単位での発表会もその一つ。毎年、「平和」や「環境」といったテーマを設定し、それぞれにクラスメイトたちと協力し合いながら研究・発表を行い、国内外を問わず、さまざまな分野に視野を広げていきます。

中学3年次には、生徒の最も身近な存在である保護者やOGを講師として招いて、「職業講演会」を実施します。生徒自らがそれぞれに職業観を深め、「憧れ」が具体性を持って深化し、高校での大学や学部・学科の研究につながっていくのが筑女流です。

「広い視野で他を知ることから、自分を知る。それが"自律"、そして"自学"につながっています。勉学には興味・関心・意欲を喚起する環境づくりが何より大切。中学では中高一貫校としてのメリットを活用し、今年度は2年次に、最も身近な先輩である本校の高校生に自らの進路について尋ねる機会を設けました。また、高校では、毎年20校を超える大学などから講師をお招きして模擬授業「追夢（ツイム）講座」を実施し、自らの進路を具体的に考える貴重な機会にしています」（菅原盛之　中学・高校副校長／以下同）

▲「憧れ」を具体的な目標にするための一助として毎年開催される「追夢（ツイム）講座」（本誌11ページでも詳しく紹介）。

個性を発揮しながら学び社会に有為な人間へ

そうした言葉に違わず、放課後になると職員室前の質問コーナーでは、生徒と教師の熱心なやり取りがあちこちに。「見放さない」「見逃さない」「見落さない」という姿勢で、躾の面も含め、連日の指導が続いています。

「筑女では習熟度別のクラス編成を行っていますが、これは生徒を序列化するためではありません。一人ひとりに合った教育環境で、可能性を最大限に伸ばすことが目的です」

この仕組みもまた、生徒たちにとっては、モチベーション維持につながっているようです。

また、多くの学校を上回る220日以上の授業日数※により、授業だけでなく、多彩な行事をとおして生徒のこころを育む姿勢も筑女ならでは。一人ひとりが在学中に、何らかの場面で個性を発揮できる環境が整備されています。

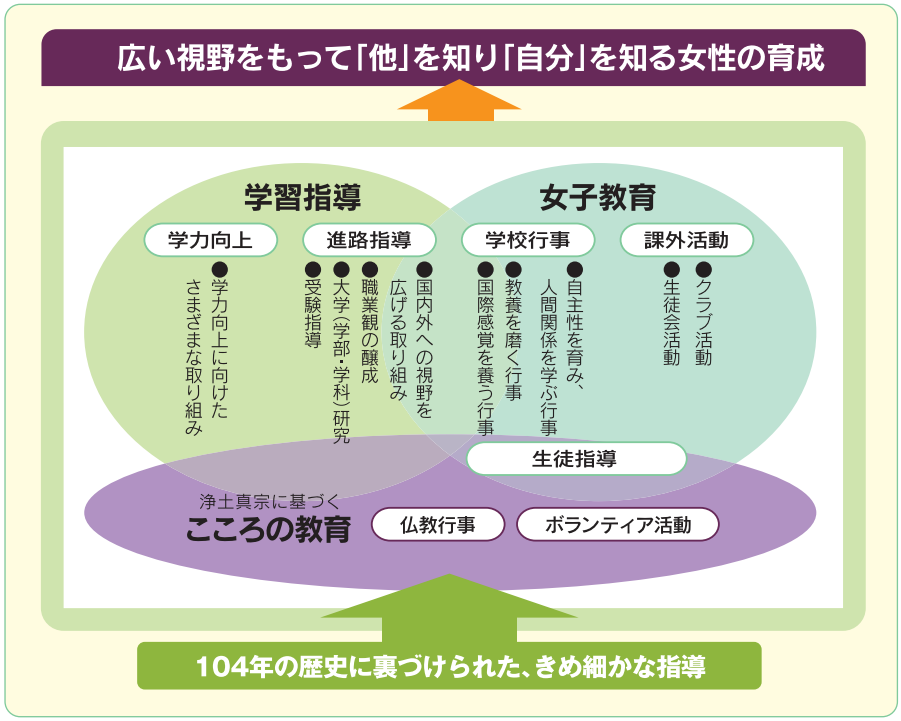
「104年の歴史は単なる伝統ではありません。女子のことを知る本校だからこそ、宗教・進路・女子教育を3つの柱にして作るさまざまなキッカケを生徒たちは吸収し、自らのものにしてくれています」

世界を知り、自分を知る。そして、社会に有為な「自律のこころ」を持った女性へ。その願いこそ、筑女の人間教育の原動力に他なりません。

※標準的には200日以下

▲「生徒一人ひとりが本当の意味で『自律のこころ』を育むよう、さまざまな環境整備や教職員同士の情報交換などに取り組んでいます」と菅原盛之副校長。

◆中学・高校の「自律のこころ」を育む教育



CASE-3
短期大学部・大学・大学院

社会で自律できる人材養成を目指して

教職員が一体となって学生生活のすべてを支援

AP・CP・DPを包括する本学独自のポリシー＝「SP」

学生の学力と学習意欲に差異が生じていることに鑑み、平成20年12月の中央教育審議会答申では、「入学者受入れの方針（AP）」「教育課程編成・実施の方針（CP）」「学位授与の方針（DP）」という3つのポリシーを有機的に結合させることで、「学士力」を保証しようとする方針が打ち出されました。さらに今年度からは大学設置基準が改正され、「学生の社会的・職業的自立」を実現するための体制作りも求められています。

これらを受け、各大学では「キャリア教育」のあり方について、それぞれに特色ある取り組みを行う中、本学は以前から独自の道を歩み始めています。

「3つのポリシーの限界を認識し、平成20年度から本学が独自に定めた第4のポリシーとして『総合的教育・学習支援の方針（SP／サポート・ポリシー）』を掲げ、その具現化を図っています。それは、『学士力』の養成には正課内外にとらわれない、教職員が一体となった包括的な取り組みが必要であると考えたからです」（假屋幸康大学・短大部事務長／以下同）

そうした方針に基づき、本学ではキャンパスにおける学生支援のすべてが「自ら考え」「自ら判断し」「自ら行動する」、自律への気づきの場であるととらえ、すべての教職員が学生の学士力向上に関わる体制作りを進めています。

▲学生スタッフの取り組み（写真）やMSGなど、筑女では答申以前から個々に取り組んできたもの。そうした意味でも、筑女の教育は時代の要請に充分応えているといえます。

学生によるさまざまな「主体的活動」を奨励

各種ガイダンスなどのキャリア支援活動やボランティア支援活動など、本学では以前から学生の主体的活動を促す取り組みを進めてきました。

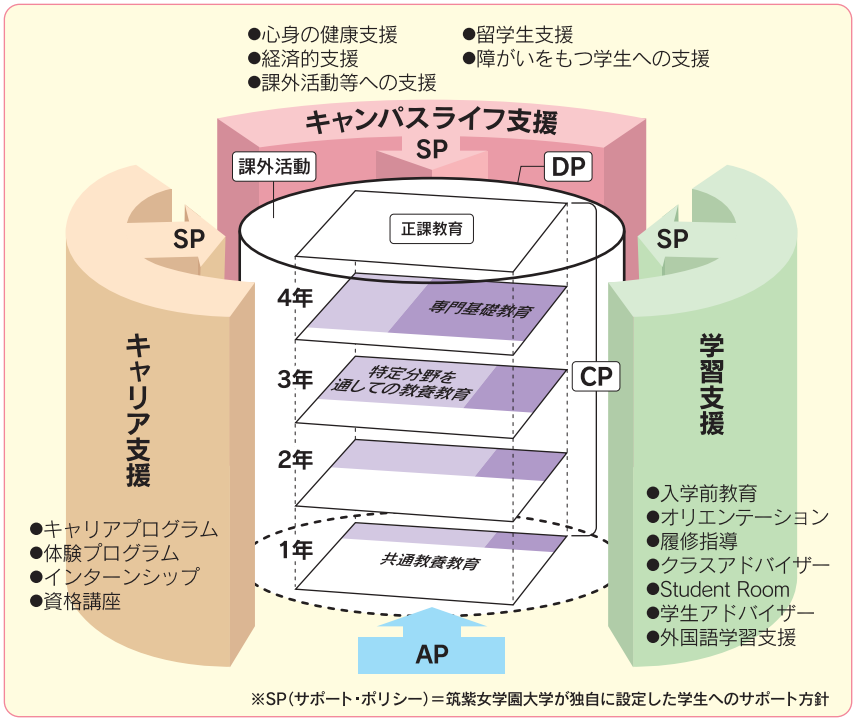
たとえば、オープンキャンパスの際に大学の紹介役として活躍する学生スタッフの起用や新入生オリエンテーションの活性化を目指すクラブ紹介のイベント化、また、視聴覚に障がいを持つ学生へのノートテイクボランティア「MSG」への支援などは、それら取り組みのひとつです。今年度は新たに「学生チャレンジプロジェクト」として、学生が主体となって、キャンパス環境や地域・社会貢献について企画、立案し、実行するプログラムもスタートしました。

「しかし、これらの活動はまだそれぞれの部署単位による取り組みとなっており、今後は4つのポリシーをすべての教職員が共有し、学生支援の全体像をとらえた上で活動を推進するようにしていきたいと思っています」

それぞれにアプローチの仕方は違いますが、いずれも教育の一環と捉えての活動であることの意義を学生に伝え、事前研修を行うなど、学生の「学士力」の養成に繋げています。

「自ら行動し、やり遂げたという経験や達成感は、必ず『自律』につながります。社会人として、また家庭人として、卒業後も『筑女』で身につけたことを実践してくれるよう、願っています」

初年次教育の充実や、全学的な意識のさらなる共有など、この先解決すべき課題はあるものの、こうした体制作りを今後も強化していくことで、「自律」した筑女生による「社会的・職業的自立」の実現に向けた支援を行っていきます。

▲「本学を卒業したら終わりではなく、学生にとって生涯にわたり役立つことは何かを考えながら、学生サポートに取り組んでいます」と假屋幸康事務長。

◆大学・短期大学部の学士課程教育全体の概念図